

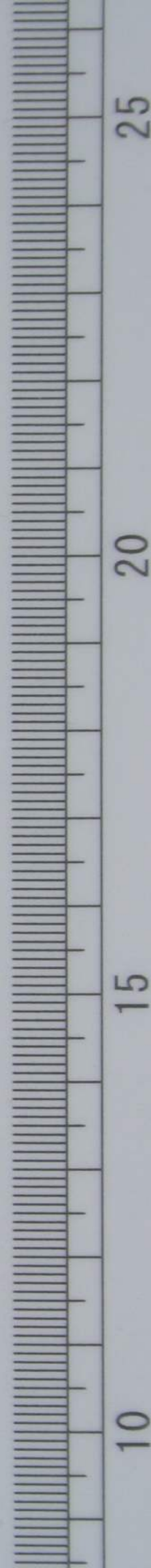
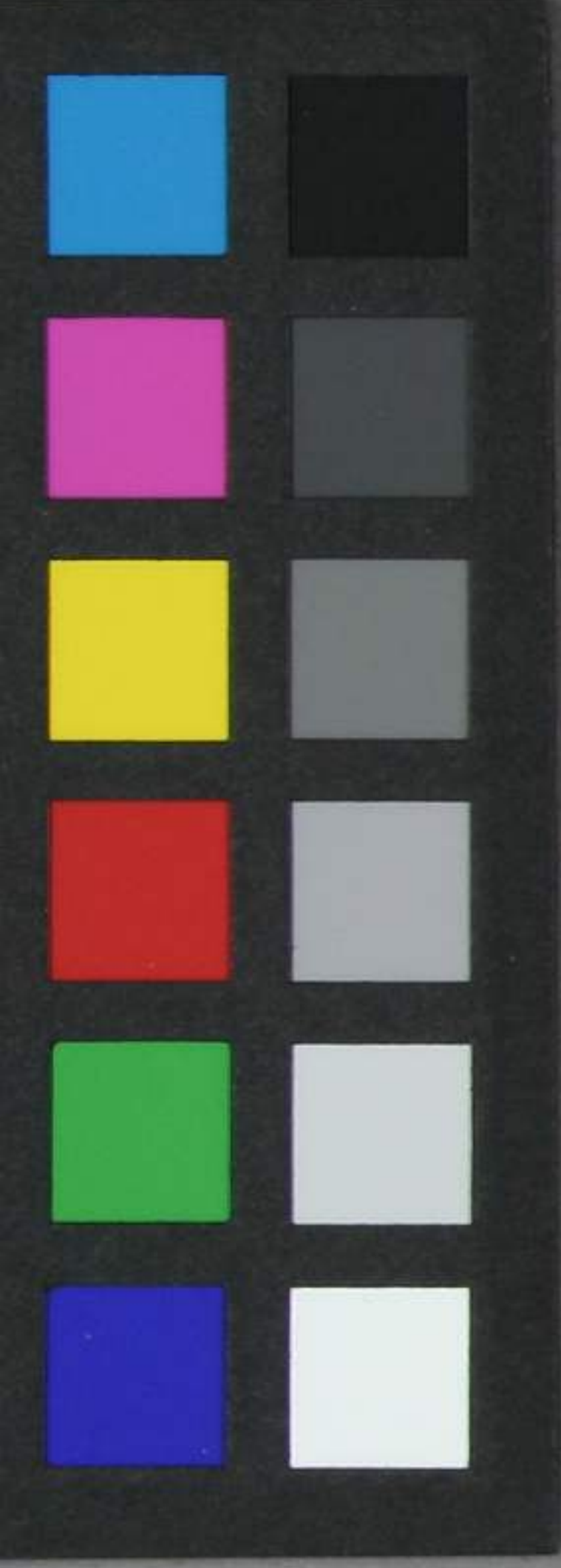
唄のひらすさ

謠民秋白

2



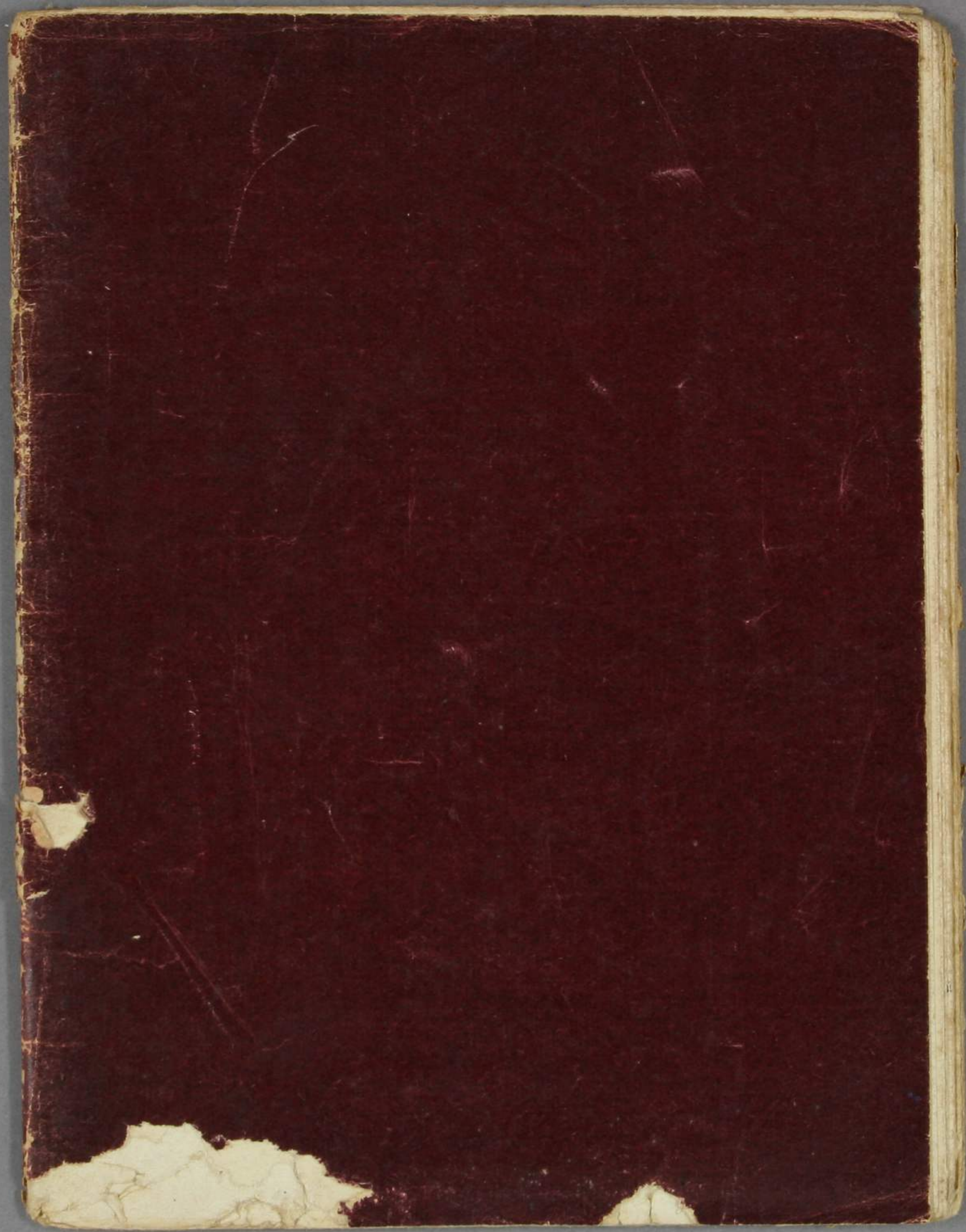
A R S













白秋民謡の言葉

燕の二つ三つと、

鰯のひこつかみこ、

たつたそれだけで代へてもらひたいのだ、

わたしのこの民謡と。

そして、歌ってもらひたいのだ。



さすいの風

東京愁夜曲

北原白秋著




目次

生ける屍の唄			
さすらいの唄	………	………	………
にくいあん畜生	………	………	………
こんど生れたら	………	………	………
カルメンの唄	………	………	………
煙草のめめめ	四章	………	………
煙草よくよく	三章	………	………
酒場の唄	五章	………	………
戀の鳥	………	………	………
別れの唄	………	………	………
花園の戀	………	………	………
槍持	………	………	………

ii

*Shirayuki*  
 白秋民謡





生ける屍の唄



「生ける屍」はトルストイの原作に成るが、先年島村抱月氏の藝術座の公演劇として改めて脚色されたものである。その劇中の小唄として、是等を私が作つた。細説すると、「さすらひの唄」はジプシイの旅情を歌つたものである。女主人公マアシヤは須磨子がつとめた。

「にくひあん畜生」はその酒場で大勢が唄ふ唄である。

「こんど生れたら」は道化た葬式の歌である。此唄を棺の中の亡者が聽いてたまらなくなつて踊り出すと云ふ、さういふ唄をこの事で作つた。

以上、中山晋平氏が作曲した。



さすらひの唄

行こか、戻ろか、極光の下を、  
露西亞は北國、はてしらす。  
西は夕焼、東は夜明、  
鐘が鳴ります、中空に。



泣くにや明るし、急げば暗し、  
遠い燈火もチラチラと。  
とまれ幌馬車、やすらよ黒馬よ、  
明日の旅路がないぢやなし。

燃ゆる思を荒野にさらし、  
馬は氷の上を踏む。  
人はつめたし、わが身はいとし、  
街の酒場はまだ遠し。

わたしや水草、風吹くままに、  
ながれながれて、はてしらす。  
晝は旅して夜は夜で踊り、  
末はいづくで果てるやら。



にくいあん畜生

にくいあん畜生はおしやれな女子、  
おしやれ浮気で薄情もの、よ、  
どんな男にも好かれて好いて、  
飽いて別れりや知らぬ顔。

飽いて別れりや別りよとままよ、  
外に女子が無いじやなし、よ。  
何をくよくよ、明日の日もござる。  
男後生樂、またできる。

男後生樂、踊らぬ奴は、  
やもめ男か、いくぢなし、よ。  
何をくよくよ、踊さへをどりや、  
すぐに女子も来てたかる。



女子ゆるゑなら身も世もいらぬ、  
どうせ名もなし、錢もなし、よ。  
ままよ自棄くそ、梵天國ときめて、  
今日も酒、酒、明日も酒。

酒だ、酒、酒、まだ夜は明けぬ、  
明けりや工場の汽笛が鳴る、よ。  
ままよ自棄くそ、一寸先や聞よ、  
今宵極樂、明日地獄。

こんご生れたら

今度生れたら驢馬に乗つておいで。  
驢馬はよいもの、市場へ連れて、  
そこで燕麦しこたま貰ろて、  
かはい女子と乗つて歸ろ。



今度生れたら金箱もつておいで。  
金はよいもの、呉服屋を呼んで、  
そこで緋繻子をどつさり買つて。  
かはい女子と寝て暮らそ。

今度生れたら鶯鳥抱いておいで。  
鶯鳥はよいもの香水屋を呼んで、  
そこで卵と品よく代へて、  
かはい女子のおめかしに。

今度生れたら酒樽背負つておいで。  
酒はよいもの、たらふく飲んで。  
そこでまたまた卒倒して死んで、  
かはい女子を置きざりに。



カルメンの唄



是等もみな藝術座の「カルメン」劇のために作られた。細説すれば、  
「煙草のめのめ」は劇中の西班牙カピラヤの街の煙草女工のうたふ  
唄である。この唄をその晩までうたつて須磨子は死んだ。

「酒場の唄」は酒場で大勢で飲み且つ唄ふものである。

「戀の鳥」は須磨子の役の女主人公のカルメンがうたふ歌である。

これは歌劇カルメンの英譯本中のそれを意譯したものである。

以上、中山晋平氏が作曲した。

### 煙草のめのめ

1

煙草のめのめ、空まで煙せ、  
どうせ、この世は癪のたね。

煙よ、煙よ、ただ煙、  
一切合切、みな煙。



2

煙草のめのめ、照る日も曇れ、  
どうせ、一度は涙雨。

煙よ、煙よ、ただ煙、  
一切合切、みな煙。

3

煙草のめのめ、忘れて暮らせ、

どうせ、昔はかへりやせぬ。

煙よ、煙よ、ただ煙、  
一切合切みな煙。

4

煙草のめのめ、あの世も煙れ、  
どうせ、亡くなりや野の煙。

煙よ、煙よ、ただ煙、  
一切合切、みな煙。



煙草よくよく

1

煙草よくよく、横目で見たら、  
好きなお方も、また煙草。

煙よ、煙よ、ただ煙。  
一切合切、みな煙。

2

煙草つけよか、紅つけませうか、  
紅ちやあるまい、脂である。

煙よ、煙よ、ただ煙、  
一切合切、みな煙。

3



煙草<sup>たばこ</sup>ぶかぶか、キツスしてゐたら、  
鼻<sup>はな</sup>のパイプに、火<sup>ひ</sup>をつけた。  
煙<sup>けぶり</sup>よ、煙<sup>けぶり</sup>よ、ただ煙<sup>けぶり</sup>、  
一切<sup>いっさい</sup>合切<sup>あつぎ</sup>、みな煙<sup>けぶり</sup>。

### 酒場の唄

1

ダンスしませうか、  
骨牌<sup>カルタ</sup>切りませうか、  
ラランララ、ラランラ　ラララ。  
赤い酒<sup>あかいさけ</sup>でも飲<sup>の</sup>みませうか。



ピアノ弾きませうか、  
笛吹きませうか。

ラランララ、ラランラ  
ラララ。  
赤い月でも待ちませうか。

闘牛見ませうか、

花投げませうか、

ラランラ、ラランラ  
ラララ。  
赤い槍でも振りませうか。

女賭けませうか、  
玉突きませうか、

ラランララ、ラランラ  
ラララ。  
赤い心臓でもあげませうか。



さあさ、退散けませうか、  
 まだ飲みませうか、  
 ラランララ、ラランラ ラララ。  
 赤い櫓にでも乗りませうか。

### 戀の鳥

カルメンのうたふ小唄

捕らへて見ればその手から、  
 小鳥は空へ飛んで行く、  
 泣いても泣いても泣ききれぬ、  
 可愛い、可愛い、戀の鳥。



たづねさがせばよう見えす、  
氣にもかけねばすぐ見えて、  
夜も口も知らず、氣儘鳥、  
來たり、往んだり、風の鳥。

捕らよとすれば飛んで行き、  
逃げよとすれば飛びすがり、  
好いた惚れたと追つかける、  
翼火の鳥、戀の鳥。

若しも、翼を擦りよせて、  
離しやせぬぞとなつたなら、  
それこそ、あぶない魔法鳥、  
戀ひし、おそろし、戀の鳥。



別れの唄



これはその初め、カルメンがうたふ小唄として作つたものの一つであるが、作曲その他の都合上舞臺には上せなかつた、ごちらにしても獨立してうたへるものなので、これもその後中山晋平氏の作曲で世に流布することになつた。

### 別れの唄

このまゝ別れて、それでよけりや、  
氣強いおまへは、さすが男よ、  
いえ、いえ、わたしは別れられぬ、  
別れられぬ。



女子を見捨て、寝ざめよけりや、  
つれないお前は、さすが男よ、  
いえ、いえ、わたしは泣けてしまふ、  
泣けてしまふ。

唇さしあて泣いたものを、  
忘れるお前は、さすが男よ、  
いえ、いえ、わたしは忘れられぬ、  
忘れられぬ。

この眼を、この手を、この心をも、  
振り切るお前は、さすが男よ、  
いえ、いえ、わたしははなしませぬ、  
はなしませぬ。

それでもゆくなら、わかれますが、  
氣儘なお前は、さすが男よ、  
いえ、いえ、わたしは死んでしまふ、  
死んでしまふ。



花園の戀



これもカルメンがうたふ小唄として作つたものである。同じく中山晋平氏が作曲した。

### 花園の戀

くるしき戀よ、花うばら、  
かなしき戀よ、花うばら、  
二人は逢ひぬ、しのびかに、  
顛へて、人目はばかりぬ。



くるしき戀よ、花うばら、  
かなしき戀よ、花うばら、  
二人は寄りぬ、今さらに、  
顛へて、眼をば見合せぬ。

くるしき戀よ、花うばら、  
かなしき戀よ、花うばら、  
二人は泣きぬ、たえだえに、  
顛へて、熱く息づきぬ。

くるしき戀よ、花うばら、  
かなしき戀よ、花うばら、  
二人は觸れぬ、おそろしく、  
顛へて、紅く口吻けぬ。

くるしき戀よ、花うばら、  
かなしき戀よ、花うばら、  
二人は死にぬ、血みどろに、  
顛へて、人に殺されぬ。



槍

持



「槍持」は「東京景物詩」の中から抜いた。これは三絃樂の舞踊にふさはしいものである。これを踊つてくれる歌舞伎役者はないか。これは陽氣なやうで、その實は淋しい私の心の反影であつた。

## 槍 持

槍は鏽びても名は鏽びぬ、  
殿につきそふ槍持の、  
槍の穂尖の悲しさよ。

槍は槍持、供揃、  
さつと振れ、振れ、白鳥毛。



けふも馬上の寛濶に、  
殿は伊達者の美しい男、  
三國一の備後様、  
しんととろりと見とれる殿御。  
槍は槍持、銀なんぼ。  
供の奴さへこのやうに、  
あれわいさの、これわいさの、取りはづす、  
やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は鏽びても名は鏽びぬ、  
殿のお微行、近習まで  
身なりくづした華美づくし、  
槍は九尺の銀なんぼ、  
けふも酒、酒、明日もまた、  
通ふしだらの浮氣づら、  
わたる日本橋ちらちらと、  
雪はふるふる、日は暮れる、  
やあれ、やれ、冷たしやの、槍のさき。



槍は槍持、供ぞろへ、  
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

雪はふれども、ちらほらと  
河岸の間屋の灯が見ゆる、  
さてもなつかし、飛ぶ鷗、  
壁のしたには廣重の  
紺のぼかしの裾模様、  
殿の御容量に、ほれほれと、

わたる日本橋、槍のさき、  
槍は擔げど、空のそら、  
澁面つくれど供奴、  
ぴんとはねたる附髭に、  
雪はふるふる、日は暮れる。  
やあれ、やれ、やるせなの、  
槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、  
さつと振れ、振れ、白鳥毛。



槍は鏽びても名は鏽びぬ。  
殿につきそふ槍持の、  
槍の穂さきの悲しさよ。  
いつも馬上の寛濶に、  
殿は伊達者のよい男、  
さぞや世間の取沙汰に、  
浮かれ騒ぐも女なら。  
そこらあたりの道すぢの、  
紺の暖簾も気がかりな、  
槍は九尺の銀なんぼ、

槍を持つ身のしみじみと、  
涙流すもつとめ故、  
さりとは、さりとは、供奴、  
雪はふるふる、日は暮れる。  
やあれ、やれ、しよんがいな、槍のさき。



發行所

東京市京橋區  
銀座尾張町

合資會社

了

ル

ス

電話銀座二一九三番  
振替東京二四八八番

版權所有

大正十一年十月二十日印刷  
大正十一年十月十五日發行  
大正十一年十一月廿日發行

著者 北原白秋

合資會社スル代表者

發行 北原鐵雄

東京市京橋區銀座尾張町新地五號

印刷者 國井五郎

東京市京橋區元區寄町三ノ七

製本金子

さすらひの唄

定價 參拾錢



集 謠 童 の ス ル ア

北原白秋著 とんぼの眼玉

定價壹圓九拾錢  
書留送料拾五錢

北原白秋著 兎の電報

定價壹圓九拾錢  
書留送料拾五錢

北原白秋譯 まざあぐうす

定價貳圓八拾錢  
書留送料拾七錢

三木露風著 眞珠島

定價貳圓八拾錢  
書留送料拾七錢

徳永燕美子著 童話 薇薔の踊子

定價壹圓八拾錢  
書留送料拾參錢



トツレフンバ秋白

第六輯	第五輯	第四輯	第三輯	第二輯	第一輯
小唄	民謡體 短唱	詩集	短章	短章	短唱
雀の頭巾	薄陽の旅	動き來るもの	初冬の星	落葉松	月光微韻

◇ 定價各冊拾錢 ◇  
◇ 送料各冊貳錢 ◇

繪入童謡  
祭の笛

北原白秋氏著及裝

前川千帆氏書 四六判絹裝極美本

本集は、白秋氏最近の童謡九十篇を收むるものにて、本集につき特記すべきは、氏が藝術自由教育の見地より、子供が楽しんで歌ひながらに、自づからその智慧をこまかく、輝やかに、その智慧を深く廣く導くために作られた新風の童謡二十篇を加へられたことである。白秋氏の美しい新作童謡を知り併せて教育的に一生面を拓いた新童謡を知らんとする人々に特に薦めする。

定價貳圓八拾錢 送料拾七錢



白 秋 民 謠

第一輯	空に眞赤な
第二輯	さすらひの唄
第三輯	朝草刈り
第四輯	城ヶ島の雨
第五輯	朝立つ虹
第六輯	朱櫓の港

◇ 定 價 各 冊 參 拾 錢 ◇  
 ◇ 送 料 各 冊 貳 錢 ◇

白 秋 童 謠

第一輯	螢	の	小	函	苺
第二輯	夢	の	小	山	
第三輯	こんこん	小	山		
第四輯	お祭	の	こ	ろ	
第五輯	お月夜	の	う	た	
第六輯	ねんね	の	お	鳩	

北原白秋氏著  
 菊 版 定 價 各 冊 參 拾 五 錢  
 二度刷美本 送料各冊二錢

小杉末醒氏畫

前川千帆氏畫

小杉未醒氏畫

木村莊八氏畫

森田恒友氏畫

木村莊八氏畫



